opusdei.org

# 待降節を生きる

聖ホセマリアによる待降節第 1主日の説教(1951年12月2 日)より。

#### 2025/11/27

典礼暦年の初めが訪れました。ミサの入祭文は、キリスト信者の生活原理、つまり、信者としての召し出しと深い関係のある事柄を考えさせてくれます。「主よ、あなたの道をわたしに示し、あなたに従う道を教えてください」「III。主の掟の頂点である愛徳図に向かうことができるよう

にお導きください、主の足跡をお示 しくださいとお願いするのです。

 $(\cdots)$ 

### もう目覚めるとき

それは容易なことではないと言われるかも知れません。確かにそうでしょう。人間の敵はその聖性の敵でもあります。キリストの精神を着る

というこの新たな生命を妨げようとしているからです。キリスト信者として忠誠を守ろうとするとき現れる障害について、ヨハネは見事に要約しています、「肉の欲、目の欲、生活のおごり」」はと。世にあるものはすべて、肉の欲、目の欲、生活のおごりなのです。

肉の欲とは感覚の乱れた傾きを全般 的に指すのでもなく、性欲を指すの でもありません。というのは、性と は人間の聖化され得る気高い一面で すから、秩序づけられている限り、 それ自体悪いものではないからで す。ですから、私は淫らなことにつ いては話したくありません。「幸い なるかな、心の清い人、彼らは神を 見るであろう | ыというキリストの 言葉はすべての人々に該当するもの ですから、清さについてだけ話した いのです。神から受けた召命によっ て、ある人々は結婚生活における貞 潔を守らなければならず、他の人々

は人間的な愛情を捨てて神の愛のみに熱愛をもって応えなければならないでしょう。いずれの場合も官能の奴隷ではなく、自分の身体と心の主人となって、人々のために献身的に自己を捧げることができるのです。

純潔という徳について述べるとき、 私はそれに〈聖なる〉という形容詞 を付け加えることにしています。キ リスト教的清さとか、聖なる純潔と か言うとき、何の汚れにも染まら ず、清らかであることに誇りを感じ るという意味ではありません。神の 恩恵によって毎日敵の落とし穴から 救われているとは言え、私たちの足 は粘土はでできているのだと自覚す ることであります。キリスト信者に とって、また一般的に人々と共に生 活する上で大切な徳がいろいろとた くさんあります。それを忘れて、こ の徳だけを特に取り上げて書いたり 説教したりするのに一所懸命な人々 がいますが、それはキリスト教を歪 めることにほかならないと思いま す。

聖なる純潔だけがキリスト教の唯一 無二の徳であるとは言えませんが、 聖化を目指して日々の努力に耐っために不可欠な徳であります。 し純潔を守らなければ使徒職へに対するなければ使徒職を明得ないでしょう。 は、霊魂も身体も能力も感覚も実は、 で主に捧げさせるあの愛の結実ではい徳なのです。

肉の欲は乱れた官能だけに限られるのではありません。神への忠実をおろそかにするという犠牲を払ってでも、最も容易なもの・快いもの・上辺だけを見て近道を選ぶ怠惰、熱意の不足をも含んでいます。

このように振る舞うことは、聖パウロも警告している法則の一つ、すなわち罪の掟の勢力に無条件降伏するようなものです。「善をなそうと思

う自分には、いつも悪が付きまとっているという法則に気づきます。

『内なる人』としては神の律法を喜 んでいますが、わたしの五体にはも う一つの法則があって心の法則と戦 い、わたしを、五体の内にある罪の 法則のとりこにしているのが分かり ます。わたしはなんと惨めな人間な のでしょう。死に定められたこの体 から、誰がわたしを救ってくれるで しょうか | m。そして使徒は、「主 イエス・キリストを诵して神の恵 み上ાのによって解放されるのである と答えています。謙遜であれば神の 恩恵はいつも与えられるのですか ら、肉の欲に対抗して戦うことがで きます。できるのみならず戦わなけ ればならないのです。

聖ヨハネの書いたもう一つの敵は、 感覚でとらえられるものにだけ価値 を認める貪欲、「目の欲」でありま す。地上の物事に吸いつけられたよ うになっている眼は、そのために超 自然的な事柄を見出すことができないのです。物質的な富に対する貪欲、他人や生活環境や時間など私たちの周囲の物事を人間的な見方によって見つめさせる歪みを、聖書のこの言葉に含めることができます。

心の眼が鈍ると、自力で十分に悟ると、自力で十分できると信じ込んで、世性します。します。します。とはいいできるとは、かけるのははないであればです。ではないではないです。でははいいのでははないです。でははいいのでははいいです。としてではいいです。といるのです。

かくして私たちの存在は、第三の敵 である「生活のおごり」の手中に無 条件に陥ることになります。これは

虚栄心とか自愛心とかを一時的に持 つというだけではなく、思い上がり の状態を持続するということであり ます。自分を欺くのは止めましょ う。これは悪の中でも最も醜く、あ らゆる逸脱の原因になるものです。 傲慢に対してはいつも戦わなければ なりません。人が死んでも傲慢はそ の翌日まで死なないと言われている のも尤もなことです。ファリサイ派 の人々は傲慢でしたから、彼らを義 とすることを神は拒まれました。自 己満足という壁があったからです。 他人を見下げ、支配し、悪くあしら うに至らせるのは傲慢によることで す。なぜならば、「傲慢のあるとこ ろには怒りと偽りとがある 1 mmから です。

## 神の慈しみ

今日から待降節が始まります。これ を機会に霊魂の敵のそそのかしにつ いて考えたのはよかったと思いま

す。そのそそのかしとは乱れた官能 や軽率さ・神に反抗する理性の狂 い・神や人間への愛を冷ます尊大な 思い上がりなどです。こういう心の 状態はすべて明らかな妨げであり、 その攪乱力は決して小さくありませ ん。そのため典礼は神の慈しみを懇 願するのです。「主よ、わたしの魂 はあなたを仰ぎ望み、わたしの神 よ、あなたに依り頼みます。どう か、わたしが恥を受けることのない ように、敵が誇ることのないように してください。あなたに望みをおく 者はだれも、決して恥を受けること はありません。いたずらに人を欺く 者が恥を受けるのです | mmと、入祭 唱で唱えました。奉献の祈りでも、 「主によりたのむ者は、はずかしめ られることがない」と、繰り返して いる通りです。

救いの時が近づいている今日、聖パウロの次の言葉を聞くと大いに慰めを受けます。「救い主である神の慈

しみと、人間に対する愛とが現れたときに、神は、わたしたちが行った義の業によってではなく、ご自分の憐れみによって、わたしたちを救ってくださいました」[12]。

聖書に目を通せば、神の憐れみの顕 れを至るところで見つけることがで きるでしょう。神の「慈しみに満 ち | 「131、「すべての子の上にひろが る上頭。「主に信頼する者は慈しみ に囲まれーエュョ、主はわたしに「先 立って進まれ」「エロ」、「主の使いはそ の周りに陣を敷き (…) 守り助けて くださしいる。「わたしを超えて力 強い上口の神は慈しみ深い父として 配慮してくださり、慈しみ深くわた しを御心に留めてくださる「エット。それ は、「日照りが続いたときの雨雲の ようしたな恵み深い慈しみはなので す。

神の憐れみの物語をイエス・キリストは簡潔に要約なさいました。「憐

れみ深い人々は、幸いである、その 人たちは憐れみを受ける| [22]と。さ らに別の機会には、「あなたがたの 父が憐れみ深いように、あなたがた も憐れみ深い者となりなさい| [23]と も仰せられました。福音書のいろい ろな場面の中でも次のようなものが 強く印象に残っています。たとえ ば、姦通した女に対するご寛容・放 蕩息子のたとえ・迷った羊のたと え・負債を許された僕のたとえ・ナ インのやもめの息子の復活ですなど。 この大奇跡を説明するために、正義 に基づく理由はいくらでもありまし た。何しろ、あの哀れなやもめの一 人息子が死んだのですから。彼女に とっては彼だけが生き甲斐であり、 老後の面倒も見てくれるはずだった のです。しかしキリストが奇跡を行 われたのは、正義によってではな く、お憐れみになったからです。人 の悲しみをご覧になって心から同情 なさったからなのです。

主の憐れみはなんという安らかさを もたらすことでしょう。「もし、彼 がわたしに向かって叫ぶならば、わ たしは聞く。わたしは憐れみ深いか らである | 1251。これは必ず実現され る約束であり招待であります。「だ から、憐れみを受け、恵みにあず かって、時官にかなった助けをいた だくために、大胆に恵みの座に近づ こうではありませんか | 1261。主の憐 れみが私たちを守ってくださるの で、聖性の敵は、何も手出しできな いでしょう。たとえ自分の弱さや過 失によって倒れたとしても、主が馳 せつけて私たちを助けてくださるこ とでしょう。「あなた方は、怠慢を 避けること、尊大から遠ざかるこ と、敬虔になること、現世の物事の 虜にならないこと、はかないものよ りも永遠を大切にすることを学ん だ。しかし人間的な弱さによって、 この滑りやすい世の中をしっかりと 歩み続けて行くことは難しいであろ う。そこでよい医者は、あなたが方

向を見失ったときに備えて手段を与え、憐れみ深い裁判官は赦しへの希望を残してくださったのだ」[27]。

# 人間からの応答

この神の御憐れみを背景として、キリスト信者の生活が展開しますきるはとしてもといる。 るでありと根をするはいるでありと根をするはどんなことであればした。 であるにはどんなことであればしまりない。 であるにはどの子があればしまりない。 であるにはなったにないました。 であるにはないました。 であるにはないました。 であるにはないました。 の生きた要のであるはいましてのです。 の生活をもつことなのです。

第一に内的生活です。これがわかる 人はまだなんと僅かなのでしょう。 内的生活という言葉を耳にすると、 うす暗い教会を想像し、でなければ どこかの殺風景な香部屋を考える 人々もあります。そうではないのだ

と言い続けて長い年月が経ちまし た。普通のキリスト信者は大抵外に いるのでその内的生活は戸外にあり ます。それは、街で、仕事・家庭・ レジャーの時などにおいて、一日中 イエスのことを忘れずにいることだ と言えるでしょう。日常生活を絶え ざる祈りの生活としないとすれば、 それは一体何になるでしょうか。あ なたを〈神のようにする〉ために導 いてくださる神との交わりを求め て、祈りの人となることが必要だと わかったのではありませんか。これ がキリスト教の信仰です。祈りの精 神をもった人々は常にこのように理 解してきたのです。アレクサンドリ アのクレメンスの言葉を借りれば、

「神がお望みになることを望む人は神のようになる」<sub>[28]</sub>のだと言えます。

最初は困難でしょう。しかし、私たちに対する父としてのあれやこれやのいつくしみに感謝するためにも、

神に向かって話しかけるためにも、 努力をしなければなりません。そう すれば、気持ちの問題ではありませ んが、神の愛も心に触れるように一 気にはっきりしてくるでしょう。優 しく私たちの後を追われるのはキリ ストであります。「わたしは戸口に 立って、たたいている」[29]。私たち の祈りの生活はどうでしょうか。一 日の間、時にはもっと落ち着いてキ リストと語り合いたいと感じること はないでしょうか。後でお話ししま すとか、後でこのことについて話し 合いましょう、などと申し上げたこ とはないでしょうか。

主との対話のために時間を決めると、心は大きくなり、意志は強められ、恩恵に助けられた知性は超自然的なことや人間的なことを深く洞察できるようになります。その結果、行いをよりよくし、どんな人とも愛徳をもって親切に交わり、愛と平和のキリスト教的な戦いにおいて、立

派な運動選手のように一所懸命に励 もうという実践的ではっきりした決 心がいつも生まれることでしょう。

心臓の鼓動や脈拍のように祈りは継続的になります。この神の現存なしには観想生活などあり得ません。観想生活がなければキリストのために働くことにもあまり価値がありません。主ご自身が建ててくださるのでなければ、家を建てる人の労苦はむなしいからです「300」。

#### 犠牲の塩

世間を捨てた修道者とは違って、信徒は社会の直中にキリストとの出会いの場を持っています。ですから目記化のためには、外的な習慣も目れるとしるしも必要としません。信者としてのしるしとは、絶えざる神の現存と犠牲の精神という内的なものです。犠牲とは身体で捧げる祈り以外の何ものでもないので、実際に

は、両者はひとつということになり ます。

キリスト信者としての召命は犠牲への召命であり、償いの召命であります。まず自分自身の罪を償わなければなりません。なんとしばしば、神を見ないように顔をそむけたことでしょう。さらに、人々の罪もすべて償わなければなりません。キリストのみ跡を近くから従うべきです。

「わたしたちは、いつもイエスの死を体にまとっています、イエスの命がこの体に現れるために」[31]。私たちの道は己れを捧げ尽くすことにあり、この自己放棄において「喜びと平和」[32]を見出すでしょう。

悲しそうな顔で世間を見ることはできません。産声をあげたときから何か特異な出来事があったかのように書かれた神の僕たちの伝記は、意図的にそうなされたのではないとしても、教理指導のためにはあまり役に

立ちません。その中のある者は、乳 児のときでも泣かなかったとか、金 曜日には乳を吸わなかったなどと書 いてあります。しかし私たちは生ま れてから好き勝手に泣き、四旬節も 待降節もお構いなしに、母の乳を力 一杯吸ったものです。

今は主の助けによって、外見上いつも同じように見える日々の中に真える日々の中でで見出すことを学立である決心を生活を改める決心を聖霊のしょう。これこそ、恩恵と聖霊のして霊魂を準備するたがして霊魂を準備するたがあるのです。くり返し申しますが、選のの恩恵によって、喜びと平和、のの思によって、対が与えられるのです。

犠牲は生活の塩のようなものです。 そして最も優れた犠牲とは、一日 中、小さなことにおいて、肉の欲・ 目の欲・生活のおごりに対して戦う ことなのです。それは他人に迷惑を

#### 信仰と理性

神の子であるという自覚をもち、祈りと償いの生活をするならば、あなたは非常に敬虔なキリスト信者となり、神のみ前では小さな子どものようになることでしょう。敬虔な生活とは子たるものの徳です。幼く自覚とはけを要する者であることを自覚なければ、また事実そうでなけれ

ば、父親の腕に子どもが身を任せる ことはないでしょう。何回も霊的幼 子の道について黙想したことがあり ます。この道は剛毅に対立するもの ではありません。というのは、強い 意志と鍛え上げられた円熟、確固と した誠実な性格を要求するからで す。

子どものように信心深いこと、しかし無知であってはなりません。各人は、できる限り、信仰に関する真剣な学問的研究、すなわち神学の勉強に励むべきです。子どものような信心と神学者のような確かな教理を身につけることが必要なのです。

神学 一 健全でしっかりとしたキリスト教の教え 一 を知りたいという熱意は、第一に、神を知り、神を愛したいという希望を動機として持っています。同時にまた、創造者の御手から出たこの世が有する、いとも深遠な意味を究めたいという信者と

しての関心によるものです。信仰と 学問、あるいは人間の理性と天啓の 間に存在するという仮想の矛盾を、 ある人々は同じような調子で何度も 持ち出します。しかし、矛盾がある と思う人たちは、問題の真の姿を理 解していないのです。

世界が神の御手から出たのであれ ば、また神が、ご自身にかたどって 人間をお造りになりほ知性の閃きを お与えになったのであれば、たとえ 困難な作業であるにしても、すべて のものが本性的にすでに所有してい る神的意義を知性が探究するのは当 然でしょう。そうすれば私たちが恩 恵の次元まで高められた結果として の物事の超自然的意味も、信仰の光 によって把握できるようになりま す。いかなる学問でも、真剣に探求 されるならば真理に達するはずです から、科学を恐れることはありませ ん。キリストご自身も「わたしは真 理である!「357と言われましたから。

キリスト信者は知識欲を持つべきで す。最も抽象的な知識の探求から手 先の技術に至るまで、すべてにおい て神に到達することができるはずな のです。人の仕事で聖化できないと いうものはありません。すべて自己 の聖化の動機となり、周囲の人々の 聖化において神に協力する機会とな るものです。イエス・キリストに従 う人々の光は谷底に隠されるべきで はなく、山頂にあるべきですが、そ れは、「あなたがたの立派な行いを 見て、あなたがたの天の父をあがめ るようになる | 1361 ためです。

このように働くことは祈りです。このように勉強することも研究することもそれぞれ祈りです。結局、いりまでは近いであり、すべては祈りであり、時まで神とでありを豊かにさせることができ、またそうでなければならないまとなのです。真面目な仕事

はすべて祈りであり得るし、祈りとなるすべての仕事は使徒職でもあります。こうして人は、飾り気はなくとも確固とした生活の一致において強められるのです。

# 待降節への期待

救い主の誕生まであと幾日と指折り 数え始める待降節第一主日の今日、 いろいろなことを十分に申し上げた と思います。キリスト信者としての 召命の真相、すなわち人々を聖性に 導き、神に近づけ、教会に一致さ せ、すべての人の心に神の国を拡げ るために、主はどれほど私たちを頼 りにしておられるかということを考 えてきました。私たちが自己を完全 に捧げ、忠実であるように、細やか で愛情深いものであるようにと主は 望んでおられます。私たちが聖人で あること、全く主のものであること を望んでおられるのです。

一方には傲慢・官能・憎悪・利己主義があり、他方には愛・献身・いつくしみ・謙遜・犠牲・喜びがあります。そして、そのいずれかを選ばなければなりません。信仰・希望・愛の生活に召されたからには、目標を下げて中途半端なところに孤立しているわけにはいきません。

ある時、鉄のおりに閉じこめられて いる鷲を見たことがあります。羽は 汚れて半分抜けており、足には腐っ た肉をつかんでいました。そのとき 自分のことを考えてみたのです。も し神から受けた召命を捨てればどう なるであろうか、と。あの鳥は非常 に高いところまで飛翔し、太陽を正 面から見つめるべく生まれてきてい るのに、おりに閉じこめられて孤独 な姿をさらしているのは残念なこと です。私たちは、神の愛と人々への 奉仕という〈謙虚な高さ〉まで昇る ことができます。しかしそのために は、イエス・キリストの光が差し込 まないような陰が心にないようにし なければなりません。イエスから記 分を遠ざけるようなすべての心配 を投げ捨てるべきです。そうすれ ば、キリストは知性にも、言葉に も、心にも、業にも留まって言葉だ るでしょう。心と業・知性と言葉か らなる生活全体はこうして神に満た されるはずです。

「身を起こして頭を上げなさい。あなたがたの解放の時が近いからだ」ないう福音書の一節を読んだところです。待降節は希望の季節です。キリスト信者としての召命についての広い視野と父である神の現存を中心とした〈生活の一致〉は、日々実現されなければなりません。

聖母が御子の降誕を待つ数ヶ月をどのようにお過ごしになったかを想像しながら、ご一緒に聖母に願いましょう。聖母は私たちが同じキリスト、キリスト自身となることができ

るように助けてくださることでしょ う。

(聖ホセマリア・エスクリバー『知 識の香』1、 $4\sim11$ )

- [1] 詩編24·4。
- [2] マタイ22・37、マルコ12・30、ルカ10・27参照。
- [3] □ マ13·11-12。
- [4] -ヨハネ2・16。
- [5] マタイ5・8。
- [6] ダニエル2・33参照。
- [7] □ マ7·21-24。
- [8] □ − マ7·25。
- [9] 創世記3.5。

[10] 箴言11:2。 [11] 詩編24·1-3。 [12] テトス3・4-5。 [13] 詩編32.5。 [14] シラ18・2。 [15] 詩編31·10。 [16] 詩編58・11。 [17] 詩編35・8。 [18] 詩編116・2。 [19] 詩編24·7参照。 [20] シラ35・24。 [21] 詩編108·21参照。

[22] マタイ5・7。

[23] ルカ6・36。

- [24] ルカ7・11-17参照。
- [25] 出エジプト22・36。
- [26] ヘブライ4・16。
- [27] 聖アンブロジオ、ルカ福音書に ついての注釈(PL. 15, 1540)。
- [28] アレクサンドリアのクレメンス、Pedagogo, 3, 1, 1, 5 (PG. 8, 556)。
- [29] 黙示録3·20。
- [30] 詩編126·1参照。
- [31] ニコリント4・10。
- [32] 「全能にして憐れみ深き神よ、平安と共に喜びを与え給え。生命と改善を与え給え。真実の痛悔の時間を与え給え。聖霊の恩恵と慰めを与え給え」(Breviarium Romanum, ミサ準備の祈り)。

- [33] ニコリント9・22。
- [34] 創世記1·26参照。
- [35] ヨハネ14・6。
- [36] マタイ5・16。
- [37] ルカ21・28。

pdf | から自動的に生成されるドキュメント https://opusdei.org/ja-jp/article/sei-josemaria-sekkyo-taikousetsu/(2025/11/30)